

2 三河国分寺跡の伽藍配置(図3参照)

三河国分寺跡は東西南北約180m四方の寺域を有し、その周囲は築地塀^{ついでい}とよばれる土を積み上げてその上部に瓦を葺いた塀により区画されていたことが明らかとなっています。寺域内には南大門・金堂・講堂などが南北に直線的に配置され、その南西部に塔があり、現在でもこの塔跡には土の高まりとともに巨大な礎石が残されています。これまでの発掘調査によって南大門・中門・金堂・講堂・回廊・塔跡についてはその位置を概ね把握できていますが、正確な大きさやその構造について十分な情報を得ていない現状があります。また、鐘楼・経蔵や僧の寄宿舍である僧房はその位置すら明らかになっておらず、これら以外にも寺域内には食事の準備を担った食堂院や僧を指導する国師(講師)が詰めた施設などが存在する可能性も考えられます。なお、寺域外の北側に展開する国分寺北遺跡や東赤土遺跡において、豊川西部土地区画整理事業に伴い実施した発掘調査では、三河国分寺が存続した頃の建物跡や各種遺物が出土しており、寺域周辺にも国分寺の維持・経営に関係したとみられる何らかの付属施設が広がっていたことが判明しています。

3 令和元年度の発掘調査概要

(1) 金堂跡

金堂跡については、これまでの調査によりおよそその位置が推定されていましたが、今回の調査において基壇(建物がのる土台)周囲に廻る溝が北・南・東面で確認できたことで正確な位置とともに、その基壇規模が東西34.5m、南北21.3mを測ることが判明し、三河国分寺跡の金堂とほぼ同じ大きさであることがわかりました。また、金堂基壇内に残る曹洞宗国分寺(現在の国分寺)の旧本堂の土壇を部分的に調査したところ、この土の高まりは奈良時代に土を盛って造られた金堂跡の基壇土であることが明らかとなりました。ただし、この土壇上に残されている礎石は曹洞宗国分寺の旧本堂を戦国時代以降に建立した際に据えられたもので、奈良時代当初の礎石やその抜き取り穴等は見つけることができなかったため、金堂の建物規模がどれほどの大きさであったのかを伺い知るには至りませんでした。

金堂跡の基壇規模を明らかにするきっかけとなった基壇周囲に廻る溝につ

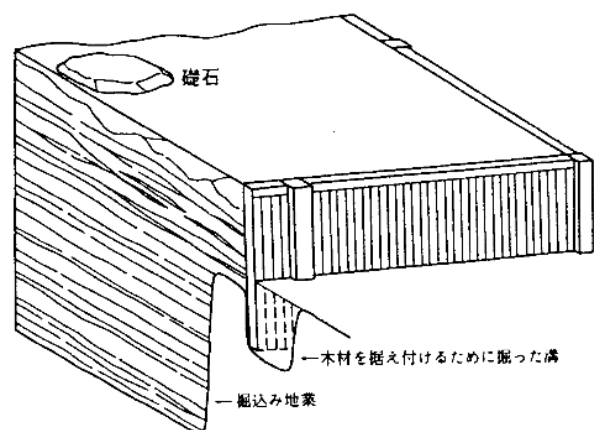


図2 三河国分寺塔跡木製基壇構造模式図

いて、その性格を明らかにするために部分的に掘り下げたところ、溝の底部において木材が据えられていた痕跡が認められました。これにより、この溝は基壇の外周を装飾するための木材(角材)を据えるために掘った溝と判明し、金堂の^{きだんがいそう}基壇外装が木製基壇であったことがわかりました。木製基壇の確認事例は全国的にもかなり少なく、貴重な発見といえます。ただし、調査では国分寺が存続したある時期に木製基壇から別の基壇外装に再整備された可能性もあり、創建から廃絶まで木製基壇ではなかったことも考えられます(再整備後の基壇外装については明らかにできていません)。ちなみに、三河国分寺跡では過去に塔跡でも木製基壇の痕跡を確認しており(図2参照)、その際に部分的に残されていた木材を分析した結果、ヒノキを用いたものであったことがわかっています。

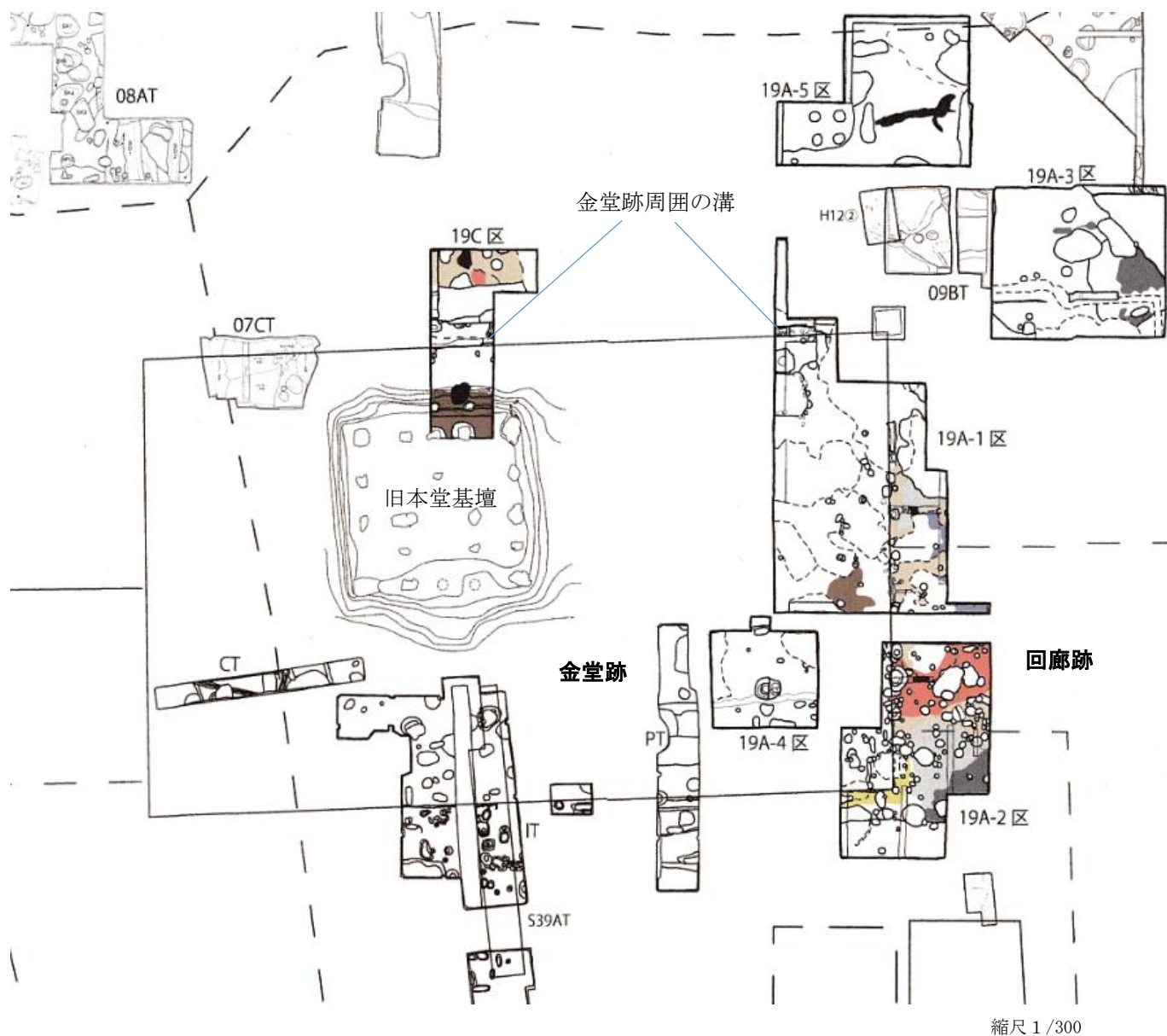


図4 金堂跡周囲の調査図面

(2) 回廊跡

回廊とは建物の間をつなぐ廊下のことで、これまでに東回廊の一部において礎石を据えていた痕跡を確認しています。今回は北回廊の東面とみられる基壇土を部分的に検出したのみで、礎石やその抜き取り穴は残されていなかったため、正確な位置や規模、構造については手がかりを得ることができませんでした。北回廊については次年度以降に改めて別の箇所にて調査を実施し明らかにしていきたいと思います。

(3) 講堂跡

講堂跡についてはこれまでの調査で基壇の東・西・南端が見つかっていましたが、今回の調査で北端を確認し、正確な基壇規模(東西 30.3m、南北 13.6m)を把握することができました。これにより国分寺の講堂基壇は三河国分尼寺の講堂基壇規模とほぼ同じであることが判明しましたが、金堂跡同様に礎石やその抜き取り穴等は見つけられなかったため、建物の大きさについては明らかになっていません。また、基壇外装についても明確にすることができておらず、今後の調査課題といえます。

(4) 僧房跡

今回の調査で講堂跡の北側に大型の掘立柱建物跡とみられる柱穴を確認し、これが僧房跡に相当する施設ではないかと考えています。柱穴は南側で2基、北側で1基の計3基を検出し、いずれもその平面形は隅円方形を呈し、柱の位置関係から東西に長く延びる建物と推定されます。調査ではこのうち1基を部分的に掘り下げたところ、柱穴の中心に直径40 cm程の柱の痕跡が認められ、この中から出土した土器片によってこの建物跡は9世紀前半に建てられたとみられます。ところで、そもそも僧房という施設は国分寺が創建された奈良時代の段階で既になくてはならない施設であると考えられますが、今回の調査ではその頃の建物の痕跡を確認することはできませんでした。また、今回確認した掘立柱建物跡を僧房とした場合、建物の東西規模を明確に把握できていないため確実なことは言えませんが、他地域の国分寺僧房跡より規模がかなり小さいことが指摘でき、定員として規定される20人の僧をこの建物で収容できたのか疑問が残ります。

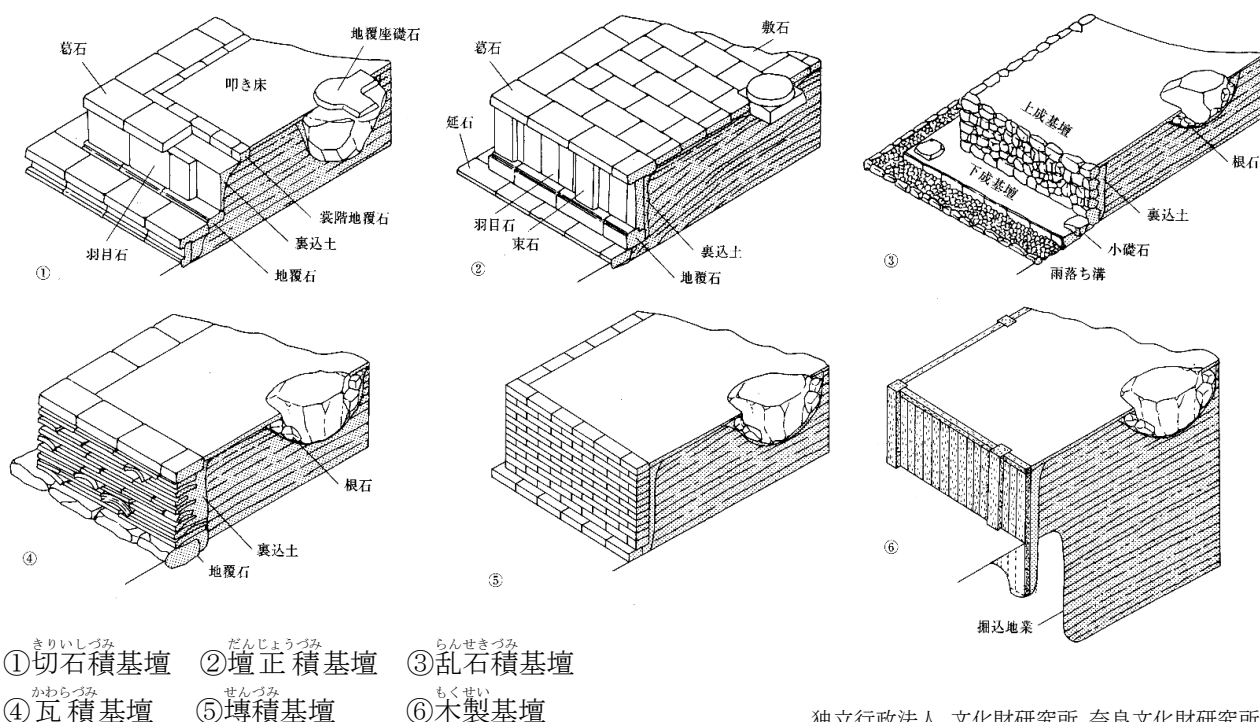
4 まとめ

今年度の調査では国分寺の中心施設である金堂・講堂跡の基壇規模を明らかにし、金堂跡の基壇が木製基壇外装であると把握できたことは非常に大きな成果といえます。一方、

鐘楼・経蔵については確認することができず、金堂・講堂跡の建物規模や北回廊の正確な位置、構造を把握するには至りませんでした。また、講堂跡の基壇外装の種類、僧房跡と推定している大型掘立柱建物の位置づけ等、今年度の調査によって新たな課題が生まれました。この他にも、将来的に史跡整備を進めていく上で解明しておくべき事柄がまだまだ残されており、次年度以降の調査で明らかにしていきたいと思えます。

【基壇外装について】

周囲の地表面より一段高く築いた建物基壇廻りを保護し整えるため、石・瓦・木などを用いて装飾化することを基壇外装や基壇化粧といい、日本の古代寺院の主要な建物では一般的に行われることが知られています。三河国分寺跡の金堂・塔跡は木製基壇外装が用いられていますが、三河国分尼寺跡の金堂跡は自然石を積んだ乱石積基壇外装が採用されています。



独立行政法人 文化財研究所 奈良文化財研究所 2003
『古代の官衙遺跡 I 遺構編』より

*三河国分寺塔跡のはぎ取り土層断面は桜ヶ丘ミュージアムに展示されています

三河国分尼寺跡史跡公園のご案内

三河国分寺跡の北東約 300mの場所に三河国分尼寺跡史跡公園があり、中門・回廊の一部の復元建物や三河国分寺・尼寺跡、三河国府跡、船山第 1 号墳などの出土品を展示する三河天平の里資料館を併設しています。三河国分寺塔跡木製基壇の模型の展示もあり、ボランティアガイドによる説明も随時受け付けています。ぜひ、お立ち寄り下さい。

住 所：豊川市八幡町忍地 127-1

開館時間：午前 9 時から午後 5 時まで

休館日：毎週火曜日・国民の祝日の翌日・年末年始

入館料：無料